

防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

11

2014

No.516



- ◆ ポリマーセメント系塗膜防水の施工管理
- ◆ 道路トンネルの保全技術

“ダダコネ建築家”が起こす漏水

鈴木 哲夫

現代の有名建築家の設計というものは、近代の建築家にはほとんどなかった漏水が多い。今回取り上げた事例は、有名建築家と大手ゼネコンとのコラボによるもので、室内床下に雨水が浸入し、床下が排水ピットのような状態になっていた(写真-1)。床下に直接漏水するため、外見では漏水形跡を確認できなかったのである。

漏水ルートは、写真-2のガラスで囲った渡り廊下の納まり不良であった。サッシといっても金物屋が造った稚拙な納まりで、調査してみたら、サッシ下端は図-1のように極端な防水納めのそぎ落としを行っていた。一応防水しなければという意識はあったようであるが、漏水しあたり前の納まりだ。

室内から見て、視界に入る水切り皿板が邪魔だから付けたくないという建築家の強い要求があったと聞く。結果的に、図-1のように横着な納まりになった。こともあろうに外側立上りに鋼板を張って立上りを後打ちし、鋼板を残してウレタンゴム系塗膜防水を施した粗末なものであった。そのため、経年で鋼板錆腐食の隙間ができ、図-1に示す漏水ルート1ができた。また、入隅はアスファルト防水とウレタンゴム系塗膜防水の境目をシーリングで納めただけだった。外部のサッシ下端(写真-3)の両側には防水立上りを施さずにタイルが張られ、立上り両脇の打継ぎにできたのが漏水ルート3である。

ラフスケッチのデザイン指示があり、それを拒否できない図式は、どこにあると読者は思われるか。

漏水が多発する建物になっても、見た目を優先する建築家の多さに、腹立たしさをおぼえるのは私だけだろうか。きっと、品確法を読んだことがないのだろう。デザインの本質を見失い、意匠はできても設計できない建築家は、もはや建築家と称する資格はない。マンションの購入者にとってはいい迷惑である。この建築家の病名は、「ダダコネ症候群自己中心性疾患」か。

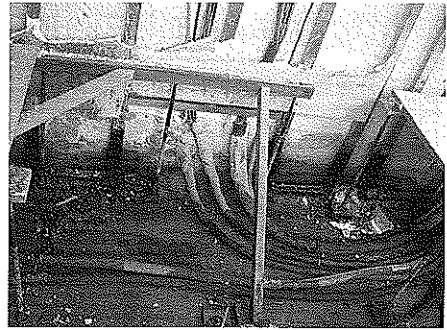


写真-1 サッシ下端の隙間等から雨水が浸入(深さ約30cm)

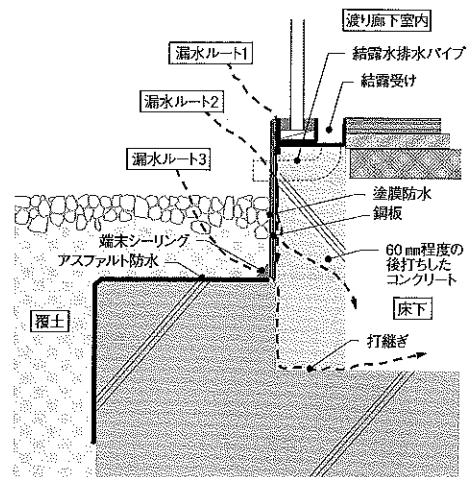


図-1 新築時のサッシ下枠回りの納まり図



写真-2 漏水原因となったガラス渡り廊下部分



写真-3 サッシ下枠に水切り皿板がなく、防水納めを無視

ちなみに、この物件を施工した大手ゼネコンは、他物件でも同じような漏水が多いため、今後は同建築家の作品の受注を見合わせるそうだ。

(有)鈴木哲夫設計事務所

代表取締役)